

臨床実習指導者講習会受講生の課題意識にもとづいた 指導の取り組みの実際

—講習会終了時と3ヵ月後の比較から—

仲沢富枝^{*} 金子道子^{*} 清水しほり^{***}

A report of an investigation at three months after completion

Nakazawa Tomie Kaneko Michiko Shimizu Shiori

(1996年10月28日受付)

ABSTRACT

The object of this research is to clarify how to use classroom knowledge to deal with work is sues.

We conducted questionnaire surveys three months after a classed compared outcomes with those obtained by members using a, "Notebook of seminar debate" upon completion. We conduted the analysis focusing on the nursing process, the practical use of nursing theory, and nursing attitudes regarding capacities and leadership the analysis was basel on the field of knowledge, feeling and will as establised by B. S. Bloomo.

Keywords : nursing activity, leadership

^{*} 本学成人看護学

^{***} 山梨県立中央病院

I、はじめに

臨床実習は看護教育の中で重要な学習課題であり、実習指導者の直接的な関わりが教育効果に大きな影響を与える。このことから臨床実習指導者の育成は、看護教育にとって欠かせない要素となっている。これまでの臨床実習指導者講習会（以下講習会という）に関する報告には、講習会受講後の意識の変化に関する調査、研修内容に関する調査、講習会の企画・運営に関する調査があるが、受講生が講習会で学んだことや課題を実践の場でどのようにいかし、取り組んでいるかを追跡調査したものはない。そこで今回は講習会終了時に受講生が課題としている内容を明確にし、講習会終了3ヵ月時点で具体的にどのように取り組んでいるかを調査した。

課題及び調査内容をB.S. ブルーム及びイリノイ大学での開発、検討した「認知領域」「情意領域」「精神運動領域」から分析し、受講生の講習会終了時の課題意識と3ヵ月後の課題意識にもとづいた指導の取りくみの実際を考察したので報告する

II、研究目的

- 1) 講習会終了時の受講生の課題を明らかにする
- 2) 講習会終了3ヵ月時点の課題意識に基づいた取り組みの状況を明らかにし、講習会終了時と比較検討する

III、本研究の概念枠組み

講習会の受講計画（表1参照）では、三期に区分し、I期では臨床実習に関する理論を学ぶ中で、看護教育の理解を中心に、看護過程の展開における実習指導について学ぶ。これをもとにII期では、臨床実習指導内容と評価について、

保健婦、助産婦、看護婦、准看護婦養成課程別に学ぶ。

I、II期を基本に受講生は、実践の場で看護過程を展開し、III期では、それをもとにグループで演習する。

受講生は、看護婦として、看護論を活用して、看護過程の展開ができる。すなわち、これらを学ぶことで看護実践者としての知識、技術、態度が備わる。ここでは、従って学生の看護過程の展開の実際に当たって、役割モデルとなれること。学生の看護過程展開のつまづき、戸惑いがあること。看護過程展開の指導の視点がわかることになるといえる。受講生はこのことを理解し、自分自身の課題として、認識できることが必要である。また、これを講習会の目標としていることから、受講生の学習の評価をBloomらの教育目標のストラテジーに照合させた3領域からみتينことにした。

IV、用語の操作的定義

- ・指導の取り組み；情意領域で「受け入れ」て、気付いたことを行動につなげていく段階で、自己のとるべき態度の方向性を明確にして行動すること
- ・意識的な具体的取り組み；情意領域の「受け入れ」であり、心の構えをもつことであり、看護の実践の場における現象を感じとり、行動としてとること

・Bloomらによる3領域

「認知領域」；知識の習得と理解。看護や看護過程に対する知識、現象の説明や問題解決に用いられる理論や概念を含むもの
「情意領域」；「受け入れ」では心の構えをもち、この段階で気づいたことを「反応」として示す。そして様々な行動が信念や一貫性と安定性をもった望ましい態度が内面化されたもの

「精神運動領域」；観察したり、知識を想起しながら行動してみるレベルであり、自

分で必要な動作を選択して操作する

V、研究方法および調査対象者の状況

1、研究方法

1) 講習会では、Ⅰ期、Ⅱ期で基礎理論を学び、Ⅲ期ではグループワークを行なった。グループワークの結果を「演習討議収録」としてまとめた。その中から講習会で学んだ事を受講生の課題として大別する。講習会終了時課題は以下の4点である。

①看護過程への取り組み ②看護婦としての姿勢 ③指導者としての姿勢 ④看護論の活用

2) 大別した課題を視点にアンケート調査
調査内容

- ①看護過程について、個人、病棟又は病院での具体的な取り組みはどうか
- ②看護婦として看護する姿勢として意識的な具体的な取り組みはどうか
- ③指導者の役割、姿勢として意識的な具体的な取り組みはどうか
- ④看護論の活用について、個人、病棟又は病院での具体的な取り組みはどうか、とした。受講生の実態を知る目的の為、B.S.Bloomらの3領域についてアンケートに明示していない。なぜなら受講生が3ヵ月後の時点で意識的に取り組んでいる実態をありのままに調査したいという目的からである。

3) アンケートの回収後に記述された内容をB.S.Bloomらの視点により区分し比較した。

B) 調査対象者および対象者の状況

- 1) H.6年度山梨県実習指導者講習会受講生のうち専任教員1名を除く64名
- 2) アンケート回収は、協力の得られた37名の解答数である
- 3) 受講前後の実習指導の関わり方の状況
 - ・受講前後とも指導している 21
 - ・受講後に指導している 3
 - ・受講前は指導していたが、受講後は指導し

ていない 4

・受講前は指導していたが、現在実習学生がいない 8

・必要時指導している 1

Ⅵ、講習会の各期のねらいと主な内容

表1

Ⅰ期	ねらい 臨床実習に関する理論を学ぶ内容 ①看護教育原論 ②看護教育対象論 ③臨床実習指導論 ・臨床実習指導方法論 ・看護過程と実習指導 ・実習記録
Ⅱ期	ねらい 臨床実習指導内容と指導方法を学ぶ内容 ①臨床実習指導内容と方法 ・看護婦養成に関する臨床実習指導内容と評価 ・保健婦養成に関する臨床実習指導内容と評価 ・助産婦養成に関する臨床実習指導内容と評価 ・准看護婦養成に関する臨床実習指導内容と評価 ②臨床実習指導に関する教科
Ⅲ期	ねらい 臨床実習指導の演習を通じて、指導の実践を評価し、指導に関して原理原則との関連でまとめを行なう 内容 臨床実習指導の評価とまとめ 臨床実習を通じての教育に関する評価

Ⅶ、調査結果

講習会終了時の受講生64名の課題は4点に大別できた。

4つの視点をもとにアンケート調査し、講習会終了3ヵ月時点の各々の事項に関する内容を数量的に類別し表1～表4にまとめた。表現の

方法は異なっても、同義の内容が書かれているものはまとめた。

書いている受講生の数を○内に数字で示した。

講習会終了時（以下終了時と略す）は、「認知領域」にみるように4つの視点に関して明らかになった課題意識は理解のレベルで受講生に受けとめられている。この理解した内容を「情意領域」にみるように積極的な姿勢として意欲をもってこれからの指導に生かしたいと言っている。しかし、抽象的な表現が多く中でも指導者としての姿勢および看護婦としての姿勢に関する「認知領域」に多くみられる。度数としても指導者としての姿勢および看護婦としての姿勢に関する「認知領域」に多い。講習会終了3ヵ月時点（以下3ヵ月時点と略す）では、「情意領域」に度数は多く、実際に臨床で具体的に取り組んでいる姿勢に、講習会で明らかになった課題への意欲が伺える。「精神運動領域」では、実現可能なレベルで受講生が個人としてだけでなく、病棟単位、病院の看護部とともに課題に取り組み実践している。

度数としては、看護過程の取り組み、指導者としての姿勢に多くみられる。また、3ヵ月時点の方が全てにおいて具体的な内容が多かった。（度数は終了時64名、3ヵ月時点37名の解答数）

Ⅷ、考察

A、看護過程の取り組み、看護婦としての姿勢、指導者としての姿勢、看護論の活用の4つの視点からの課題意識と取り組みの実際

①看護過程の取り組み

終了時、抽象的に自己の看護活動を振り返り、学習内容から自己の課題を明らかにしている。

「認知領域」にみる度数は⑮であり、「情意領域」では看護過程の展開に意気込みが感じられるが、僅かで度数は⑥である。3ヵ月時点では、「情意領域」での度数は⑨となり、より具体的

に実現可能なレベルで意気込みが伺え、「精神運動領域」の度数は⑳で、実践の具体的な内容は個人だけでなく、病棟、病院看護部、実習指導者間で取り組んでいることがわかる。自分のことから課題意識に基づいた行動をとっており、講習会での学習の成果の実際がわかる。

②看護婦としての姿勢

終了時、看護の目的、機能・役割を意識した上で対象を全人的にみることの必要性および思考過程を明らかにした看護展開の必要性を認識し、「認知領域」の度数は、㉑であった。臨床実習指導者として「看護する姿勢」が指導に反映されることを認識している。「情意領域」で終了時に看護婦としての取り組みの姿勢は、抽象化されていて、度数も少ない。しかし、3ヵ月時点ではよりよい看護の提供のために自分のことから実践しようとしており、しかも、度数は⑮と多い。「精神運動領域」では確信をもって実践している内容があり、受講生自身が手応えを感じているようだ。さらに看護婦としての自己の問い直しを実践を通して振り返っていることがわかる。

③指導者としての姿勢

終了時、「認知領域」で看護職としての役割モデルがとれることが、指導者として大切なことを㉒の度数をもって理解している。「情意領域」では、終了時指導者としての気負いから開放され、学生とともに学習しようとする姿勢が伺える。3ヵ月時点では、学生主体の実習の展開をさせるためにどのように指導者が関わればよいかについて見つめている。「精神運動領域」では、学生の学内での学習内容を確認し、看護婦として家族、患者を尊重した接し方をしていくことが、すなわち指導なのだと考えて実践している。さらに受講した個人だけでなく、学生を受け入れるスタッフ全員が指導しようとする姿勢がもてるように働きかけている。

④看護論の活用

終了時、看護論の活用の必要性を理解しているが、度数は⑥と少ない。ただ「情意領域」で

は、看護論を学びたい、自分のものにしたいという意気込みはつよく、度数は⑬と多い。3ヵ月時点での「精神運動領域」の度数は⑫であり、僅かだが看護論の学習をすすめて着実に実践しようとしている。看護論の活用による看護過程の展開には至っていないが、わかろうと努力していることが理解できる。

B、「認知領域」「情意領域」「精神運動領域」の視点からみた課題意識と取り組みの実際

①「認知領域」

臨床実習指導者として、看護の内容では「看護の対象の理解」と「健康問題に関する知識」及び「看護実践のための方法」を理解すること。指導者としては「学生指導の原理原則」「学生のとらえ方」「指導の方法」を理解することが要求されている。

終了時、受講生は「看護の対象のとらえ方」については、病気とか疾患を中心ににしたこれまでの見方から、健康障害をもつ人としての見つけ方を学び、今までの対象のとらえ方の振り返りと確認をしている。また、個別的な看護の必要性を理解するとともに個別的な看護の実際というのは、看護理論を活用して看護過程を展開しながら、より看護の裏付けをもった看護を実践することであると理解している。そして、これら理解したことが、学生指導にとっていかに大事であるかという認識をもっている。

②「情意領域」

終了時、受講生は看護者として、訓練された観察力を持ち、患者によりよい看護をしたい。そのためには指導者である自分の思考を明らかにして理論と結びつけて、問題解決能力を身につけることが必要であると受けとめている。これによって臨床実習場の看護を充実させ、学生とともに悩み、苦しみ学びを分かち合いたいと述べている。3ヵ月時点では、患者の背景をより深く知ろうとし、その人の生活全体をみている。そして意識的に関わることで一人の患者をひとりの人間として、個性性を考えることができる。さらに看護論を学び、看護過程が展開で

きることで、科学的裏付けがもてるといっている。このように看護婦として看護する姿勢が指導に生かされると考えている。これによって学生のレディネスのちがいが、学校が臨床実習に期待するものをふまえ、学生個々の感情、行動を尊重した指導ができると考えている。

③「精神運動領域」

自分の看護観がより意識化でき、明確になり、院内外の研修に参加し、看護論を学んでいる。これによって情報1つ1つの解釈から情報間の関係を見つめることで、個性ある看護過程につながるよう、受講生として個人は勿論、病院、また病院として看護過程委員会を発足させて勉強会を実施している。このように終了時に講習会で学び得た知識をもとに、指導者としての意欲をもち3ヵ月時点ではより具体的に取り組んでいることがわかる。このように指導者が科学的裏付けをもった看護展開をすることが、指導の視点を明らかにすることにつながる。そのためには、指導者が個人として実践しても限界があることを知り、指導者同志がまた、病棟全体が或いは看護部がこれまでの指導の体制を見なおしたり、整えは始めている。

まとめ

終了時、看護過程の取り組み、看護婦としての姿勢、指導者としての姿勢、看護論の活用について抽象的にとらえていたが、3ヵ月時点では具体的に実現可能なことから実践に移し、受講生自らが手応えを感じていることがわかった。

「認知領域」「情意領域」「精神運動領域」はともに関連しあっており、その内容ははっきり区分することには限界がある。しかし、3ヵ月時点のアンケート結果から「精神運動領域」の内容を分析すると、受講生は臨床実習指導者として指導に関わるには、まず看護婦として看護実践能力が必要であるといっている。そして、看護実践能力というのは看護の対象をどのようにみつめるか、対象の健康問題をどのようにと

らえるか、又、個別的な看護実践は看護論を活用した看護過程の展開ができることではないかと理解している。そしてこの力があれば指導の要点、視点がわかり、しかも学生のレディネスにあった又、学生個々の感情や行動に合った指導ができると考えており、可能なかぎり実践している。

尚、3ヵ月時点で表中の※にみるように「戸惑い」を感じている受講生がいることは、本研究のアンケート調査作成上の限界であり、又、調査時点が年度替わりの3～5月の実践状況であるため、人事による移動や実習生がいないため、実践できない現状によると思われる。

参考文献

山梨県臨床実習講習会 演習討議収録 平成6年度

【参考資料】

看護過程への取り組み 一表2—

認知領域	情意領域		精神運動領域	備考
講習会終了時	講習会終了時	講習会終了3ヵ月	講習会終了3ヵ月	
・自分が看護過程の展開ができることが必要 ① ・アセスメントの曖昧さ、根拠の薄さ、理論と実践の合目的性の必要性 ⑥ ・理論的根拠に基づいた情報の整理が必要 ② ・看護論に基づいた看護過程の展開、活用方法を理解する ⑤ ・対象の全人的理解の必要性を理解した ①	・自分の思考を明らかにして理論と結びつけて展開するようにしたい ① ・病棟での日頃の看護過程の振り返りをしたい① ・個別性のある看護展開をしたい③ ・看護婦にどのくらい問題解決能力が備わっているかが大事である ①	・プライマリーナーシングにむけ取り組みをした① ・自分の職業に対する意識と看護計画を立案し、それを実行し、評価しなければならない ① ・看護記録の監査を計画している ⑤ ・計画だけでなく、実践としての看護過程を病棟の業務、勉強会に取り入れていきたい ⑤ ・スタッフ全員で勉強会をする予定。意欲はある ③ ・患者の全体像をとらえ、あらゆる側面から理解してケースに結びつけるよう努力したい ② ※各勤務帯で努力しているが、思うようにいかない ① ※自分の自覚がもてただけで、スタッフの教育まで至っていない 実習指導者としての能力に欠け看護論、看護過程の展開も未熟、しかし、仲間と頑張りたい ①	・病態生理について学習を深め情報の関連をどのように理解したらよいか指導に工夫をしている ① ・病棟で看護過程の勉強会をしている ① ・病院として看護過程委員会を発足 病棟では、受け持ち制導入により、看護計画の立案退院までを受け持ち看護過程の展開をしている ⑥ ・実習指導委員会を1/月行い看護過程の見直しを行なっている ② ・受講した者同志で1/月看護過程の勉強会をしている ① ・看護計画の見直しをしている ① ・看護論を活用して看護過程の展開をしている ② ・まず、情報収集から見なおしている ③ ・自己の思考過程をはっきりさせ、SOAP展開をすることで、統一した看護をするようにしている ① ・個人で看護過程の勉強をしている① ・移動により、積極的な取り組みをしていない ① ※具体的にどのように看護過程にとりこんでいったらよいかわからない ①	※今後の課題

○内の数字は同義の回答を述べた数を表す

教育評価ハンドブック：B.S.Bloom 他編集著、梶田 叡一他訳、第一法規、1976

佐藤光子他：看護教員養成講座終了者の研修内容に対する認識とその要因、東京都立医療技術短期大学紀要 1996,3

伊藤暁子他：臨床（地）指導者に求められる能力と教育内容、看護展望、18(5)63-70.1993.4

西尾和子：教育・指導・育成の前提にあるもの、看護展望、21(4)1996,3

西本勝子、杉野元子：看護臨床指導のダイナミックス、医学書院

大熊紀代子、杉野元子：学生を育てるのは、臨床側、学校側の共同責任、看護展望、17(8)：21 1992

臨床指導を考える、第55回医学書院、看護セミナー講演、高橋シュン、看護教育、26(2)1985

看護婦としての姿勢 一表 3—

認知領域	情意領域		精神運動領域	備考
	講習会終了時	講習会終了3ヵ月	講習会終了3ヵ月	
・ 個別的な看護の必要性を理解し、個別的な看護をする ⑧ ・ 看護の目的、役割を明確にした実践の必要性⑥ ・ 全人的に疾患や病気でなく、健康障害をもつ患者としてとらえることを理解した、このような考え方ができる ⑦ ・ 思考過程を明らかにした看護展開ができるようにしたい ① ・ セルフケアについての考え方が拡大した ② ・ 理論的看護の提供の必要性が理解で、看護の提供に理論性をもちたい③ ・ 看護の視点がわかり、理論の付け方が理解できた ①	・ ナイチンゲールの三重の関心をもって患者の看護を行ないたい ① 看護婦の目と耳とは訓練が必要訓練された観察力をもちたい ① ・ 学びの姿勢を強化したい ① ・ 経験やカンでは駄目、理論的裏付けをもって看護したい ② ・ 患者によりよい看護をしたい ② ・ 現場の看護を充実したい ① ・ 一例一例を大事にして看護を高める努力をする ① ・ 放送大学の臨床心理学を学びたい ①	・ 患者を生活する人として見るようにしている ② ・ 患者の背景をより深く知ろうとする姿勢ができた ① ・ 患者を色々な角度から観察しようとしている① ・ 疾患や症状に目を向けることが多かったが、講習後より患者の全体像を観ていくように、また、個々の健康観についても情報を得るようにし、積極的に看護するようになった ① ・ 科学的裏付けを考えるようにしている ② ・ 患者その人その人の背景、生活に目を向けられるようになった ① ・ 患者がその人らしく療養できるように考えている ① ・ 患者に関われば関わるほど手応えがあり、毎日意識的に関わるようにしている ① ・ 一人の患者を一人の人間としてとらえ個性をもっており、方法論があり、看護することの大切さを念頭においている① ・ 表情や言葉ががけひとつひとつに注意し、いまの状態、患者の思っていることなどひとつひとつ聞いていくよう接している ①	・ 自分の看護観を患者に生かせるよう工夫した ② ・ 今まで漠然ととらえていた患者像が何をどのようにすれば看護診断に結びつか、実際の現場ではまずは情報整理からきちんとするように心がけ、それをのちの看護展開につなげられるようにしている ① ・ 受講前に比べ自分の看護観がより意識かでき、明確になったため、看護の姿勢も前向きになったり、考えられるようになった ① ・ 患者の声が聞こえるように近くにいられるようにしている ① ・ 患者、家族の恐怖心を和らげたり、病気に対する理解を深め生活様式を調整する指導やサービスを行なっている ① ・ 看護が責任をもつ範囲はどこなのか、専門性はどこにあるのか、実践をとおして確認している ① ・ 学生を指導することで毎日の看護の振り返りのきっかけとなっている ① 情意領域 終了3ヵ月後 ・ 看護と医療の違いを考え関わっている ① ・ 看護婦の背中を観ている、看護の基本を守り、患者によりよい看護が提供できるようにしている ③ ・ 家族、患者を尊重した接し方をしている ① ・ 看護基準等を作成し、すべての看護婦が同じレベルで学生に関わっていけるような姿勢をもつ必要がある ① ※看護の難しさを実感し、どのようにしたらよいか不安でいっぱい	※今後の課題

○内の数字は同義の回答を述べた数を表す

指導者としての姿勢 一表4—

認知領域	情意領域		精神運動領域	備考
講習会終了時	講習会終了時	講習会終了3ヵ月	講習会終了3ヵ月	
・学生が学校で何をどう学んでいるかを知って指導する必要性を理解した② ・説得力のある裏付けをもった看護展開ができる① ・指導者が考える看護を理論的に伝えることが必要① ・どう考えどう学べたかを引き出すことが必要であることを理解した① ・看護職としての役割モデルがとれる⑫ ・看護観を明確にできる① ・患者のことをよく知っている① ・看護の目的、役割を明確に学生に伝える⑥ ・学生の思考過程を導きだす指導をする① ・現場で理論的、個別的看護を実践するようにする③	・実習記録の大変さを理解した① ・学生が看護する喜びにつながるようにしたい① ・愛をもって指導したい① ・いつでも見守っていてくれるという安心感を与えたい① ・学生と共に学習する③ ・学生と悩み、苦しみ、感動しあう① ・指導者としてわからないことを明確に確認する① ・姿勢で臨む① ・コミュニケーションのとりやすい患者を選択する① ・押しつけでなくサポート的な役割をもつ①	・学校からの到達目標を確認しながら個人の能力、要求に応じて指導していくための精神的関わりを重視したい① ・まずいいところを探し、誉めるところから始めている① ・学生を肯定的に観るようになった① ・学生と一緒に学ぶ姿勢をもち、看護とはいつまづいた時、修正していけるようにしている① ・指導者の姿勢は生徒のレディネスを把握し個々を引き上げていくことだと思う① ・学生の行動、感情を肯定的にとらえ、その学生の状況にあった指導ができるように心がけている① ・学生の欠点、不足を先にいさずどうしたら気づき、方向性を与えることができるかを、常に前提に考えている① ・指導者の役割は最終的には看護婦が患者個々に対する役割を認識しその役割が学生らにも共通の、看護の役割だということを認識させていく① ・学生をあくまでも待つ立場、聞く立場となるように心がけている①	・学生、スタッフ間の人間関係の調整をしている① ・看護婦として自分だったらどうするか率直に話すようになった① ・学生を把握してよりよい指導体制を整え指導の効果が上がっている① ・学生個々を理解しようと受け持ち制をとり関わっている② ・スタッフに対し実習目的を明記したプリントを配布した① ・授業の内容把握、実習要項の見直し、実習方法の検討をした① ・受け持ち患者を通して看護が考えられるような実習ができるように関わっている① ・教え込み過ぎないように道筋を作ってあげられるように意識して指導している① ・学生は常に看護婦を見ていることをスタッフが意識し、役割モデルがとれるように話している④ ・学生と一緒に看護していく姿勢をもち取り組んでいる① ・看護婦の背中を観ている、看護の基本を守り、患者によりよい看護が提供できるようにしている③ ・家族、患者を尊重した接し方をしている① ・看護基準等を作成し、すべての看護婦が同じレベルで学生に関わっていけるような姿勢をもち指導している①	

○内の数字は同義の回答を述べた数を表す

看護論の活用 一表5—

認知領域	情意領域		精神運動領域	備考
講習会終了時	講習会終了時	講習会終了3ヵ月	講習会終了3ヵ月	
・経験からの看護ではない、患者の全体像をとらえ、病態生理を理解し、看護理論に基づいた看護の必要性を理解した② ・看護理論を活用して看護実践する必要性を理解した⑥ ・看護実践の理論的基盤の必要性を理解した② ・看護によって理論構築の必要性を理解した①	・看護理論のむづかしさ② ・看護理論の理解に向けた学習をしなければならぬ① ・看護論を学び身に付けたい⑫ ・看護理論の適用のため事例検討をすすめたい① ・看護者全員が看護の諸概念の理解をするようにしたい① ・看護理論の学習会を発足させたい①	・指導者に伝達し、学習会をし、看護理論を勉強したい① ・ヘンダーソンの理論を自分のものにしたい① ・病棟で学習会を計画している③	・看護理論を用いて看護診断の学習会をしている① ・個人的には看護論の学習ができず研修会に参加している④ ・院内研修として、看護論と看護診断を計画し、実施している⑤ ・すでに病院でNANDAの診断名を活用しているが、まだことばの概念が曖昧だったり、統一できていないので、学習会をしている① ・本を活用して、自己学習している①	

○内の数字は同義の回答を述べた数を表す